

金剛院経塚

平成23年度



2012年3月

まんのう町教育委員会



金剛寺正面 南より



第1テラス 経塚群分布状況 北東より

【表紙】金華山 全景 南東より

序 文

まんのう町教育委員会では、平成23年7月5日から平成23年12月5日までの5ヶ月間で、断続的に金剛院経塚の発掘調査を行いました。

金剛院は、平安時代末期から鎌倉時代にかけて繁栄した寺院で、金剛院金華山懶寺と称していましたと言われています。

現在、境内から出土した鎌倉時代の瓦が町で保管されています。楼門前の石造十三重塔は、現在は上の3層が欠けいますが、鎌倉時代中期に建立されたもので、まんのう町の有形文化財に指定されています。

寺の後ろの小山は金華山と呼ばれ、各所に、経塚があり、山全体が経塚と思われる状態でした。

昭和37年の調査で発掘された陶製の経筒外容器などが、町で保管されています。

地区的仏縁地名や経塚の状態から見て、当寺は修験道に関係の深い民衆の埋經作善の聖地であったと思われます。

明治の神仏分離によって、鎮守神であった妙見社（現、金山神社）と分離して、寺は廃寺となりましたが、明治12年に再興して、浄土真宗寺院として今日に至っています。

金剛院本堂裏、寺院敷地より北にあたる標高207.6メートルの小高い山の頂上に存在する経塚群より、昭和37年の発掘調査で12世紀前半から13世紀前半の経筒群が出土したことから、約100年の間、連綿と経塚が造られていたことが確認されています。

平成23年度の調査は、山の中腹にある第2テラスにおいて実施しました。テラス中央部で遺構面を確認し、柱穴と見られる遺構3基、土坑1基、溝状遺構1条を検出しましたが、時期の特定には至っていません。

このたび多くの方々のご高配とご尽力により、「金剛院経塚」の調査報告書第1集目を発刊する運びとなりました。本報告書が、経塚等の研究資料として広く活用されますとともに、文化財に対する理解と关心が一層深められることになれば幸いです。最後になりましたが、本発掘調査に格別のご指導とご協力をいただいております関係の皆様方に心から深く感謝申し上げますとともに、今後ともよろしくご支援賜りますようお願い申し上げ、序文に代えさせていただきます。

平成24年3月

まんのう町教育委員会

教育長 北山正道

例　　言

1. 本報告書は、まんのう町教育委員会が、文化庁の文化財補助金を受けて平成23年度国庫補助事業として実施した、香川県仲多度郡まんのう町炭所東1686-1他に所在する金剛院経塚の報告を収録した。
2. 発掘調査及び報告書の作成はまんのう町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査及び報告書の作成にあたって、以下の方々のご教示、また関係機関の協力を得た。記して謝意を表したい。(敬称略、五十音順)
片桐孝浩、上里八重子、鈴木信男、森下英治、香川県教育委員会生涯学習・文化財課、香川県埋蔵文化財センター、金剛寺檀家の皆様、まんのう町文化財保護協会
4. 本報告書で用いる方位の北は、旧国土座標第IV系の北であり、標高は東京湾平均海水位(T.P.)を基準としている。
5. 挿図の一部に、国土地理院長の承認及び助言を得て同院所管の測量標及び測量成果を使用して得た平成20年3月測図まんのう町1:2500地形図を縮小編集したまんのう町全図(1:10000、承認番号 平19四公 第4号)を使用した。

目 次

1. 調査の経緯	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 遺跡の立地と環境	4
(1) 地理的環境	4
(2) 歴史的環境	4
3. 調査の成果	6
(1) 概要	6
①第2テラストレンチ1	6
②第2テラストレンチ2	13
(2) まとめ	13

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2
第2図 平坦地分布図	3
第3図 周辺の遺跡	5
第4図 金剛寺・金剛院経塚全体図	7
第5図 第2テラス平面図	9
第6図 第2テラス上層断面図	11

写 真 図 版 目 次

- 図版1 金剛寺正面 南より
第1テラス 級塚群分布状況 北東より
- 図版2 第2テラス トレンチ1 掘削前状況 南西より
第2テラス トレンチ1 掘削前状況 北西より
- 図版3 第2テラス トレンチ1 完掘状況 南より
第2テラス トレンチ1 完掘状況 北東より
第2テラス トレンチ2 西半 完掘状況 南より
第2テラス トレンチ2 東半 完掘状況 東より
- 図版4 第2テラス トレンチ1 南部 土層断面 南東より
第2テラス トレンチ1 中央部 土層断面 北東より
第2テラス トレンチ1 北部 土層断面 北東より
- 図版5 第2テラス トレンチ2 西部 土層断面 南東より
第2テラス トレンチ2 中央部 土層断面 南西より
第2テラス トレンチ2 東部 土層断面 南東より

1. 調査の経緯

(1) 調査に至る経緯

まんのう町では町内に所在する仏教関係遺跡群を計画的に調査・整備し、地域住民が誇りをもてる貴重な文化財として保護・活用を図ることを目的に「まんのう町仏教関係遺跡群調査事業」を開催している。平成22年度までは国指定史跡中寺廃寺跡の調査を実施してきた。平成23年度は新たに香川県仲多度郡まんのう町炭所東字金剛院に所在する、石仏山金剛寺の裏山に位置する「金剛院経塚」の調査に着手した。

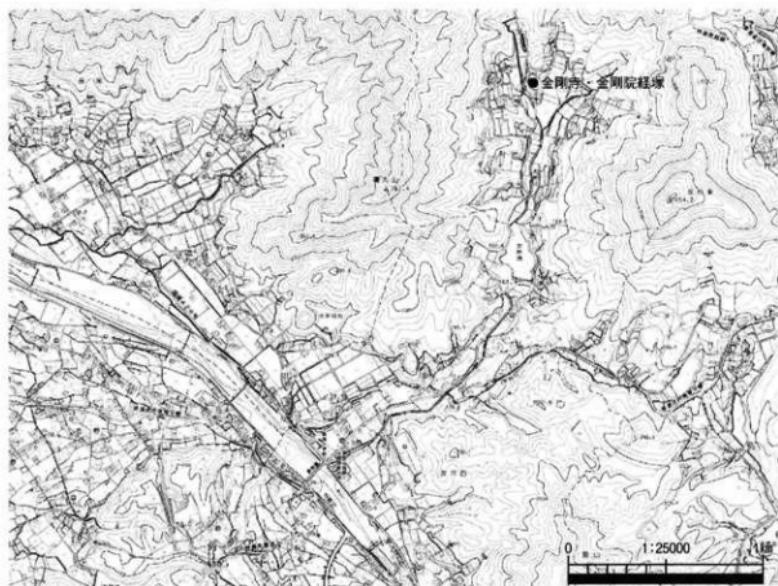
金剛院地区では仏教に関係した地名が多く残り、過去に大規模な寺院が所在したとの伝承が語り継がれてきた。しかし、金剛寺の由来を記した古文書は現在まで確認されておらず、金剛寺門前に位置する十三重の石塔（鎌倉時代後期）のみが歴史を物語る資料であった。昭和時代に入ると金剛寺裏山において集石が露出し、瓦や土器などの遺物が採取され始めた。

これを契機に、昭和37年に地元有志を中心として金剛院経塚の発掘調査が行われた。発掘調査では2基の経塚が調査された。当時の記録によると、陶製経筒外容器5点が埋納された経塚1基を完壊し、陶製経筒外容器1点が埋納された経塚1基を半壊したとのことであった。調査時に出土した遺物は発掘調査以外で採取された遺物とともに、金剛寺に保管されていた。

現在、保存状態の良い鉄製経筒1点、陶製経筒外容器9点、陶製経筒外容器蓋9点、銅鏡1点がまんのう町の有形文化財に指定され、未指定の遺物も含め町へ寄託されている。

(2) 調査の経過

現地作業は、平成23年7月5日から平成23年12月5日までの5ヶ月間で、断続的に実施した。調査は、まんのう町教育委員会が調査主体となり、社会教育課中寺廃寺発掘調査室が担当した。現場作業は、社会教育課中寺廃寺発掘調査室が公益社団法人香川県シルバー人材センター連合会に作業員の派遣を委託する方式で行った。調査区は、現状でのテラスの分布状況より、頂上のテラスより第1テラス、2段目を第2テラスと呼称することとした。調査はまず、第2テラスにおいて、テラス斜面を含む範囲の地形測量を行った後、第1トレンチ、第2トレンチの順で掘削を行った。埋め戻しについては、掘削によって露出した最低面に砂を散布し、その上に掘り上げた土を埋め戻した。整理作業は発掘調査と並行して行い、発掘調査終了後に報告書編集作業を行った。



第1図 遺跡位置図



第2図 平坦地分布図

2. 遺跡の立地と環境

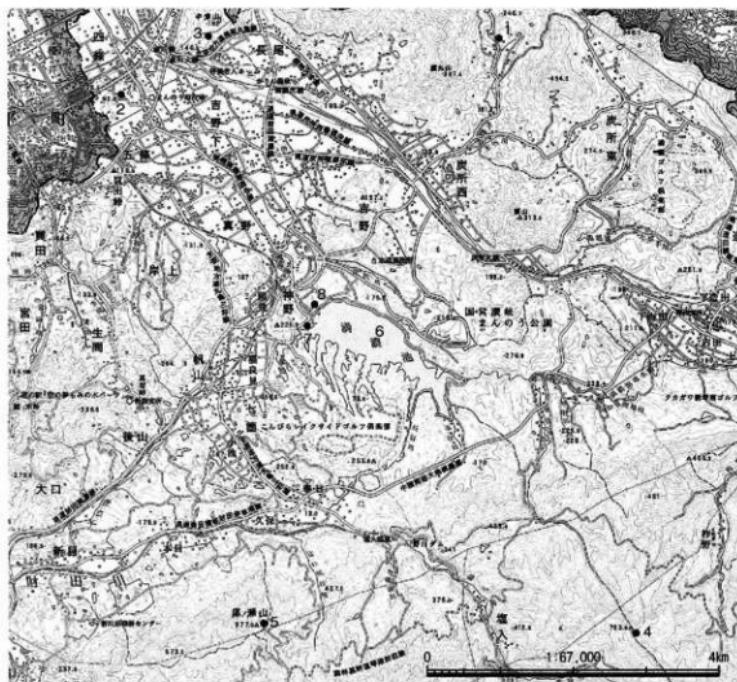
(1) 地理的環境

まんのう町は、平成18年3月20日に香川県仲多度郡南部の3町（琴南町、満濃町、仲南町）が合併して誕生した町である。香川県中部（中讃）に位置し、東は綾川町・高松市、西は三豊市、北は丸亀市・善通寺市・琴平町、南は徳島県美馬市・三好市・東みよし町に接している。町の面積は194.33km²、人口は約2万人である。町の南部及び南西部には、標高1,000mを超える竜王山(1059.9m)、大川山(1042.9m)を主峰とする讃岐山脈が連なり、その麓を県下で唯一の一級河川土器川が北流している。

金剛院経塚は、土器川右岸の高丸山・貓山・小高見峰などに開まれた狹隘な谷部に開けた金剛院地区に所在する。金剛院地区は山間部にありながら、阿弥陀越や法師越といった峠道により交通の便は良く、古来より峠を介しての往来が盛んな地域であった。金剛院地区の谷部のほぼ中央に金華山と呼ばれる標高約207mの小山があり、その南側斜面に石仏山金剛寺が、山頂部に経塚群が所在する。

(2) 歴史的環境

まんのう町内には各時代・各種類の文化財が散在しているが、中でも古代から中世にかけての重要な仏教関係遺跡が所在することが特徴である。それは白鳳・奈良期の古代寺院である弘安寺廃寺・佐岡寺跡、平安時代の山林寺院である国指定史跡中寺廃寺跡、平安時代後期から中世の山林寺院である尾背廃寺跡、平安時代後期の経塚群が所在する金剛院経塚、弘法大師空海との関係が深い満濃池・神野神社・神野寺等である。これらは中寺廃寺跡と満濃池を除き詳細な調査は行われていないが、これまでの断片的な調査から見えてくるものは、白鳳・奈良期の古代寺院、平安時代の古代山林寺院、平安時代後期～中世の山林寺院、経塚群という変遷の可能性であり、またこれらが約10kmの範囲内に所在し相互に関係した可能性が高く、まんのう町に古代から中世にかけて華開いた仏教文化を物語る貴重な文化財といえる。



番号	遺跡名	主要遺構	主要遺物	時期
1	金剛寺跡塚	経塚群・十三重石塔	鉄製軽筒・陶製経筒外容器・銅鏡・六葉複弁蓮華文軒丸瓦	平安時代～鎌倉時代
2	弘安寺廃寺	礎石・塔心礎石	十六葉細單弁蓮華文軒丸瓦・十二葉細單弁蓮華文軒丸瓦・八葉單弁蓮華文軒丸瓦・八葉複弁蓮華文軒丸瓦・唐草文軒平瓦・三重弧文軒平瓦・四重弧文軒平瓦	飛鳥時代後半～奈良時代
3	佐岡寺跡	石塔・標石	未確認	奈良時代～中世
4	中寺廃寺跡	掘立柱建物跡・塔跡・礎石建物跡・基壇・石組遺構	三鈷杵・錫杖・石帶・八葉複弁蓮華文軒丸瓦・西播磨彦須恵器・多口瓶・越州窯系青磁碗・佐波理・須恵器・土師器・黒色土器椀・鉄釘	8C後半～12C
5	尾背廃寺跡	礎石建物跡・列石・石垣・集石	白磁四耳壺・八葉複弁蓮華文軒丸瓦・巴文軒丸瓦・均整唐草文軒平瓦・平瓦・丸瓦・須恵器・土師器・青磁碗・鉄釘	12～16C
6	満濃池（周辺遺跡含む）	須恵器登窯跡・箱式石棺・横穴式石室	須恵器短頸壺・鉄製刀子・須恵器・土師器・サヌカイト・窯壁	弥生時代～現代
7	神野寺	未確認	未確認	奈良時代～中世・現代
8	神野神社	鳥居・石灯籠	未調査	古代～現代

第3図 周辺の遺跡

3. 調査の成果

(1) 概要

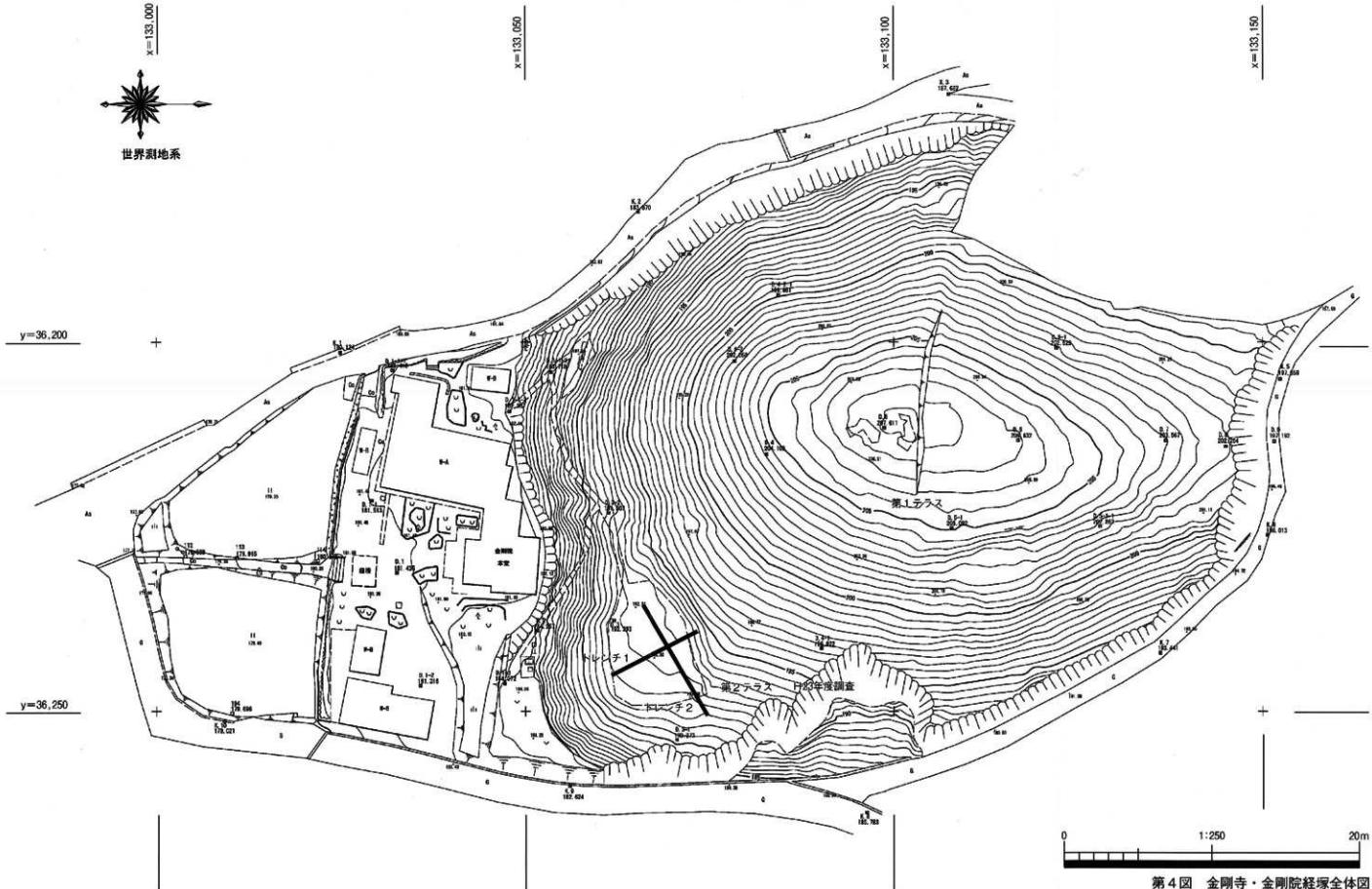
本年度の調査は第2テラスについて実施した。第2テラスは金剛寺本堂裏、寺院敷地より北にあたる標高207.6mの小高い山の中腹にある平坦地で、頂上には経塚が確認された第1テラスが存在する。第1テラスの面積は約1,040m²、第2テラスの面積は約230m²で第1テラスより南東側急斜面を約15m下った標高192.6m付近に位置する。なお第1テラスの北半は近年の耕作地造成を被り、経塚群も現地表面では確認できなくなっている。第2テラスは北西の山側斜面を切土し、南東の谷側斜面に盛土して造成されたと考えられ、山側自然地形の傾斜が約22度、切土部分の傾斜が約48度となっている。現在、第1・2テラスとともにヒノキが植林されており、第2テラスは近年まで耕作地として利用されていたとも言われている。

本年度は第1テラスの経塚調査に先立ち、第1テラスに近接する第2テラスの造成の形態、利用年代、金剛寺に関連する遺構・遺物の有無等、平坦地の性格を把握することを目的とし、詳細な地形測量とトレンチ調査を実施した。トレンチは、テラス中央で交差する2本を設定した。テラス中央部で遺構面を確認し、柱穴と見られる遺構3基、土坑1基、溝状遺構1条を検出した。土坑、溝状遺構の一部のみ遺構内部まで掘削調査を行った。

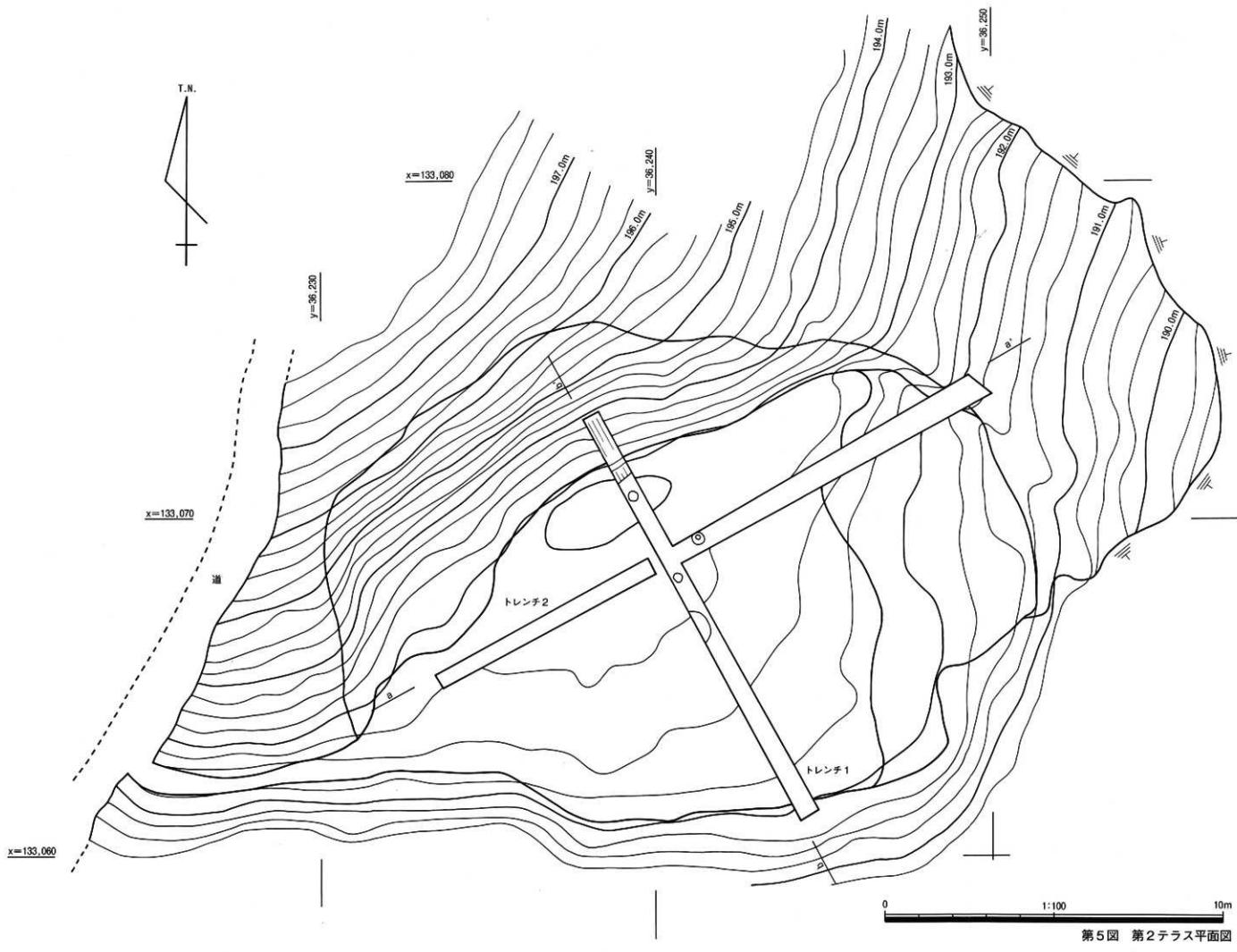
①第2テラス トレンチ1

第2テラス中央部を南北に、標高191.89mから193.91mにかけて長さ13.72m、幅0.5mで設定した。堆積土層は、腐葉土層、腐植土層、盛土層、流土層から成る。平坦地を造成した形跡があり、山側の切土を谷側へ盛土したと考えられる。その上位へ、流土、腐植土、腐葉土が堆積している。テラス中央付近で認められる腐植土層は、テラス端で認められる腐植土層より腐植質が少なく、旧耕作土であった可能性も考えられる。流土層は、にぶい褐色～黄褐色粗砂質土で、谷側の盛土上位に20～30cm認められる。盛土層は、黄褐色細～粗砂質土で3層が認められ、下位の自然地形と同じ傾斜で堆積していると推測される。

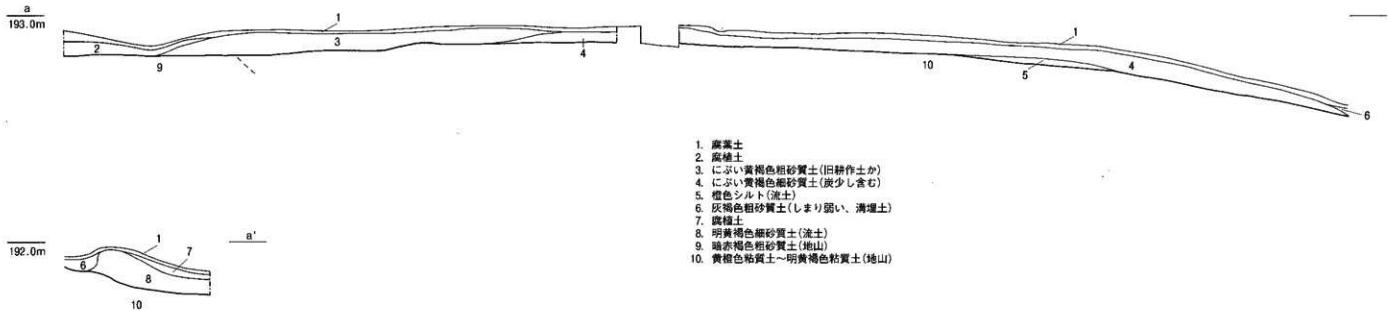
遺構面は、現地表面より約30cm下でほぼ水平に検出された。遺構面の標高は192.5m前後を測り、南東の谷側へ向けて緩やかに下がっている。テラス中央部の地山直上で、柱穴と見られる遺構2基と土坑1基検出したが、谷側の盛土層上面で遺構は認められなかった。山側の切土直下では、テラス北辺に平行する溝状の遺構を確認した。溝状の遺構は、深さ15cmを測り、山側斜面からテラスへの雨水の侵入を防ぐための排水溝であると考えられる。溝跡上位では、近年のテラス利用時に掘削したと考えられる溝跡が認められる。土坑1基は、トレンチ西壁にかかり半裁したが、遺物は出土しなかった。盛土層である18層中から平瓦片が1点出土したが、磨滅しており、時期の特定は困難である。



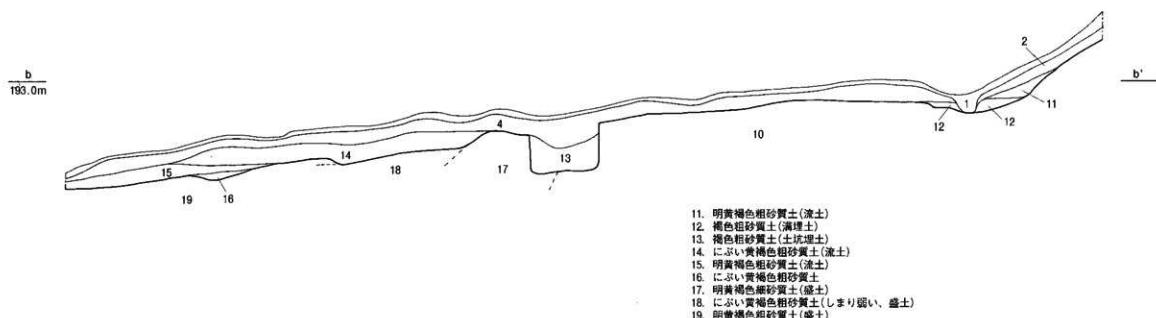
第4図 金剛寺・金剛院経塚全体図



第5図 第2テラス平面図



トレンチ2



トレンチ1



第6図 第2テラス 土層断面図

②第2テラス トレンチ2

第2テラス中央部を東西に、標高192.80mから191.61mにかけて長さ18.9m、幅0.5mで設定した。堆積土層は、腐葉土層、腐植土層、流土層から成る。水平な地山面が2面あり、トレンチ西端より東へ4m、約10cm上がり9m連続することから平坦地を造成したと考えられる。その上位へ、流土、腐植土、腐葉土が堆積している。腐植土層は3層から成り、腐植質が少ない層位が、トレンチ1から連続する4層とトレンチ西半3層の2層認められる。流土層は、地山直上で3層認められる。平坦面東端に約10cm堆積した橙色シルトと、トレンチ東部に約40cm堆積した褐色系の細～粗砂質土から成る。トレンチ東部の流土層は、雨水の流路の埋土とその上手にあたり、流路が4層の端を通ることから、近年のテラス利用時に人為的に掘削したものと考えられる。

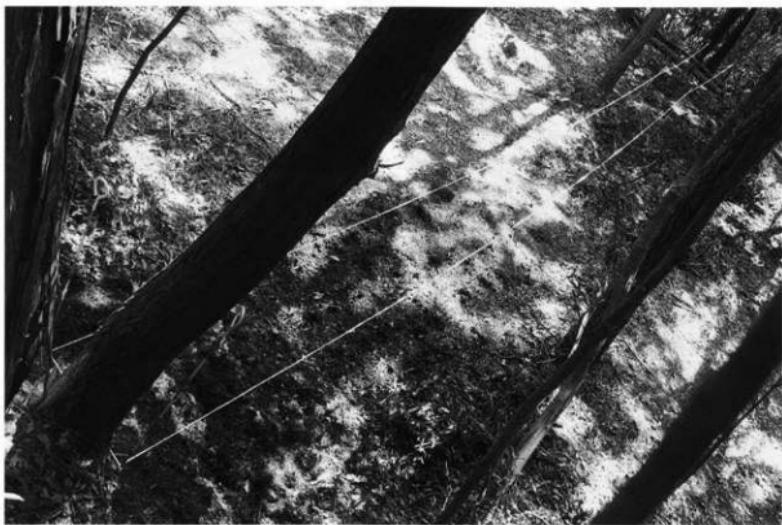
遺構面は、現地表面より20～30cm下で水平に検出された。遺構面の標高は192.5m前後を測り、テラス中央部より北東の谷側へ向けて緩やかに下がっている。テラス中央部の地山直上で、柱穴と見られる遺構1基を検出した。トレンチ2からは、遺物は出土しなかった。

(2) まとめ

金剛院経塚では、昭和37年の発掘調査によって第1テラスに経塚が存在していることが分かっている。第2テラスでは、経塚もしくは金剛寺に関連する遺構を確認するために、トレンチ調査を行った結果、僅かに遺構を検出し、テラスとしての利用があったことが確認された。しかし、柱穴遺構の検出数が少ないため、建物の復元は困難である。遺物についても、磨滅した半瓦片が1点出土したのみで、時期決定の根拠となる遺物に乏しく、時期を特定することは困難である。本年度は短期間の小規模なトレンチ調査のみに終わったが、今後、第1テラスの昭和37年以来の再発掘調査や、まんのう町の文化財に指定されている金剛寺十三重塔の発掘調査、周辺住民への旧地名の聞き取り調査等を進め、金剛院経塚・金剛寺の歴史的様相を明らかにしていきたい。



第2テラス トレンチ1 挖削前状況 南西より



第2テラス トレンチ1 挖削前状況 北西より

図版3



第2テラス トレンチ1 完掘状況 南より



第2テラス トレンチ1 完掘状況 北東より



第2テラス トレンチ2 西半 完掘状況 東より



第2テラス トレンチ2 東半 完掘状況 東より



第2テラス トレンチ1南部 土層断面 南東より



第2テラス トレンチ1中央部 土層断面 北東より



第2テラス トレンチ1北部 土層断面 北東より

図版5



第2テラス トレンチ2西部 土層断面 南東より



第2テラス トレンチ2中央部 土層断面 南西より



第2テラス トレンチ2東部 土層断面 南東より

報告書抄録

まんのう町内遺跡発掘調査報告書 第10集

**金剛院経塚
平成23年度**

平成24年3月31日 発行

編集・発行 まんのう町教育委員会 中寺廃寺発掘調査室

〒766-0202

香川県仲多度郡まんのう町中通875番地 琴南公民館内

電話 (0877)85-2221

印 刷 株式会社 美巧社

